

学生街の秋

平成 27 年 10 月

沼尾 利郎



御茶ノ水駅と神田川

1 御茶ノ水

毎年秋になると、東京御茶ノ水で過ごした10代最後の1年間を思い出します。「御茶ノ水」とは変わった地名ですが、その由来はユニークなものです。江戸幕府2代目将軍徳川秀忠の時代、この地にあった高林寺という寺の庭から泉が湧き出るのでその水を秀忠公に差し上げたところ、お茶に用いられて「大変良い水だ」と徳川家御用達になったことから、この地が「御茶ノ水」と呼ばれることになったそうです。

JR 中央線御茶ノ水駅のホームに立つと眼下に流れる神田川が深い溪谷となっていますが、この地は洪水対策と同時に江戸城の外堀の役目として江戸時代に本郷台地を開削して人工の谷が作られ、現在の神田川となりました（仙台藩主伊達政宗が工事をしたので仙台堀とも呼ばれています）。我々が普段何気なく通り過ぎている風景にも、歴史が深く関わっているのですね。



御茶ノ水駅前交差点

2 名物講師

御茶ノ水と言えば昔から「学生の街」として有名ですが、高校卒業後の1年間を私は御茶ノ水の予備校に通いました。当時の受験界は駿台・代ゼミ（代々木ゼミナール）・河合塾の3つが御三家と呼ばれ、「仁義なき戦い」（笑）を繰り広げていましたが、私の通った予備校にも当時の受験生なら誰もが知っている有名講師がずらりと揃っていました。英語の伊藤和夫先生と鈴木長十先生は受験生のバイブルと言われた「基本英文700選」の共著者ですが、その風貌と講義内容は好対照でした。伊藤先生は「生真面目な研究者」タイプで「わかる人だけついて来なさい」というクールなエリートでしたが、一方の長十先生は田舎の素朴なおじいさんという感じ（顔も口調も田中角栄に似ていました）でいつも話が面白く、「学力の低い人でもわかった気にさせる」そんな先生でした。

個性豊かな講師陣の中で今でも忘れられない感銘を受けたのが、奥井潔先生の講義でした。長身瘦躯でいつも疲れたように憂いに満ちた雰囲気漂わせながら、しかし一たび講義が始まるとT・S・エリオットやポール・ヴァレリー、グレアム・グリーン、サマセット・モームなどの文学的意義を妖しい毒舌と挑発的な口調で熱く語りかけるその姿は、多感な受験生にとってはあまりにまぶしく英語の授業の枠を完全に超えていました。

人の生死は不如意だよ 諸君！（奥井 潔）

先生が学徒出陣で悲惨な戦争体験者であると知ったのは、それからずっと後のことでした。受験英語にはほとんど役に立ちませんでしたが、奥井先生には人生を教えていただきました。



予備校の授業風景



明大通り（昭和50年代）



神田神保町（昭和50年代）

3 昭和49年の東京

地方出身の予備校生にとって、御茶ノ水という街はすべてが新鮮で刺激的でした。明大通りを南に下れば神田神保町の古書店街となり、丸善や三省堂、書泉などの大型書店がいくつもあり、それまで見たこともなかった洋書や高価（そうな）美術書なども手に取ることができました。この街はまた楽器店（当時はギターが中心）やスポーツ店（スキーブームはまだ）も多く、明治大学・中央大学（八王子の山中に移転する前でした）・アテネフランセ・文化学院などの多種多様な学生でいつもあふれていたのです。昭和49年（1974年）は超能力（ユリゲラー）がブームとなり、ニクソン大統領や田中角栄首相が辞め、そして長嶋茂雄が引退した年でした。

「将来に対する漠然とした不安」を抱えながら御茶ノ水で過ごした1年間でしたが、あの時代にあの空気感を感じながら学生生活を送れたことは、その後の自分が何らかの形で現在でも影響を受けているのだと、いま改めて思っています。